

＝ 危機的状況にあたって ＝

今年に入り死亡災害が立て続けに発生している。報告時期とのズレはあるが1月に1件、2月に2件、3月に2件、そして残念ながら4月5日にも大切な命が失われた。

死亡災害は決してあってはならぬこと。常に命の尊さを語り、働く仲間の命は、家族はもとより、私たちのすべてであると互いに胸に刻み込んできた。地道といわれようとも「ご安全に」の挨拶に魂を込め、リスクアセスメントの実践、安全チェックシートを活用、そして基幹労連結成以来の尊い教訓のもとで独自に整理した死亡災害事例のCD-ROMの配布と労使による横展開など、諸活動に取り組んでいるが死亡災害の連鎖に歯止めがかからない。

本年発生 of 災害も含め、これまでの死亡災害のほとんどは墜落・転落、挟まれ・巻き込まれの類似災害である。

日刊鉄鋼新聞にこんなコラムが記載されていた。「ある工場で新人が大ぶりのハンマーを振った際に軽くしくじりそうになった。それ自体はたいそうな話ではないのだが、見ていた現場のベテラン指導員は『ひょっとして』と考えた。後日勤続10年未満の技能職を集めてみたら見事にハンマーを振れたのは一握りだったそうだ。訓練所で初歩を教えるから現場で重量・高温物を扱う経験を積ませる。この積み重ねがあっただけに、『こんな基本ができていなかったとは』と指導員は心底驚いたらしい。今どきの若者がだらしないという話ではない。ものづくりの共感をもって入ってきた若者たちだ。製造現場への思いも強いし、やる気もある……。男の子ならナイフや大工道具に慣れていて当然、という時代背景のもとで子供時代を過ごしていない。やれて当たり前と思いきまないと……。」

私たちの職場にそのまま置き換えることのできる話である。年齢、勤続、経験の数値に捉われず、具体的な指示・指摘が災害防止につながる。就業前の「TBM、KY」、行動前の指差呼称は、当たり前ではなく、本当にその目的にかなったやり方となっているのか、仲間を守るための厳しい目を持たなければならない。

お叱りを覚悟で言わせてもらえれば、もとに戻すことのできる怪我ならば後に教訓となり得るが、命は戻っては来ない。残るのは愛する家族・仲間を失った言葉にできない悲しみと、苦しみと、心の痛み。

今一度、組合員とその家族の幸せ追求に向けた基幹労連の運動の基盤は「常に人を真ん中に据えた職場原点の好循環の追求」にあることを徹底してほしい。真ん中の軸を無くしては何も生まれない。労使をあげた安全点検を切にお願いする。ご安全に。

2018年4月6日  
日本基幹産業労働組合連合会  
中央執行委員長 神田 健一